

記憶の手ざわり 世界をつなぎとめるために

作家の言葉

面影

合間を体感するとは、どんな意味だろうか？それはある空間、欠如、一時停止、間隔、それとも身ぶりだろうか？合間とは、決まったかたちや期間が定まったものではない。それは時間を目安に測られることがある一芝居の幕間の30分、独裁政治の一時的な覇権の空白、あるいは停戦など。複数の記憶をまたぐものでもある。合間とはなにかで常に測ることができないものでもある。かたちがないにもかかわらず、時空間をとらえる最も普遍的な方法のひとつとして、その存在を捉えることも可能だろう。

このレジデンス滞在期間中、門や舞台のイメージは私の制作における中心的存在となった。映画のスチル画像のように、門はある地点に注意を向けさせ、私たちの移動や動きに対する意識を高める。舞台の演技が日常の一コマを切り抜くように、劇場でもこうして見る者の意識を集中させる場面があるだろう。

アーティストカフェクオカのグランド・スタジオに、私は既存の体育館のステージに連なる二つの門を制作した。立体構造物の周囲、つまり二つの門の前後や狭間、そこに映る影の中に、複数の作品が配置され、インスタレーションとして展開する。作品の各部分は、参照点でありながら互いに関連しあう。

本作は、2024年から現在まで続いている連作《Intervals》の一部でもある。小さく折りたためる紙から生まれたこれらの作品は、どれも一日で完成する。このシリーズは、模型、ドローイング、立体作品、ノートといったもののあいだに存在している。移動を繰り返していた時期に、習作としてはじめたものだ。ここに展示する小作品は、日本での滞在期間中に制作された。どのように見て、どのように見られるか、どのように都市とその歴史の影をたどるのかを私が学んだ過程を示している。

作品タイトルに使用したポルトガル語「traço」には、複数の意味がある。家系に引き継がれる外見的な特徴、時間をかけて習得された身振り、または何かを描いたり、なぞったりするときの一本の線をあらわす場合もある。インスタレーションには、さまざまなもののあいだをたどる痕跡が集う。私が福岡で過ごした数か月と、福岡にゆかりある私の先祖たちの人生のあいだ。三島由紀夫の小説「禁色」とその翻案である最初の舞踏公演、私自身の記憶のあいだ。移住や離散の経験と、地元や故郷での経験のあいだ。あるいは、人種にまつわる複数の歴史のあいだ。皮膚の色、セクシュアリティ、そして見るという行為とのあいだ。作品は残された痕跡だけでなく、そのあわい、複数の合間にも着目している。

小田原ルーカス

作家の言葉

身体に刻まれた音

今回の展示では、二点の作品—《鳥はこのように鳴くらしい》と《スローソングス、ファストラブ》—を通じ、音、記憶、日常の身振りがどのように福岡と台湾の歴史の痕跡を継承しているかを探求する。音を聞く、介入するという些細な行為を通じて、作品は都市環境がいかに身体を形成し、文化的な記憶がいかに時間と地理的距離を超えて伝播するか、過去が現在にいかに関与し続けているかを検討する。

《鳥はこのように鳴くらしい》は日本の都会では馴染み深い音から始まる。歩行者信号から流れる鳥の鳴き声のようなメロディーだ。横断歩道を安全に渡るための音声案内は、自然を模した音でありながら、公共空間における人の動きを制御するという指示機能をもつ。福岡で、私は無作為に歩行者に声をかけ、この信号機の音を思い出して真似てもらった。本物のメロディーに近い音を再現できる人もいれば、躊躇したり、あいまいに口ずさむ人もいた。こうした不完全な音の模倣が、マルチ・チャンネルのサウンドインスタレーションの素材となり、複数の声として重なり合い、空間を漂う。人々が「鳥」を一つまり機械による合図を一真似する行為は日常の身振りを形成する様々な構造に対する、ささやかな応答となる。

《スローソングス、ファストラブ》では、前述のそれとは異なる音に着目している。1936年に発表された演歌「博多夜船」は、のちに日本統治時代の台湾で台湾語版がリリースされた。かつて慕情、別れ、海を隔てた想いを表現した曲だが、現代の博多湾は、ロマンチックな観光スポットになっている。これを知った私は、小さな花の折り紙を港に置き、短い文章を残した。「この花は、決して到着しない人々に贈られる」。この身振りは、しばしば愛というものが演出され、消費される空間への静かな介入である。

作品は、台湾の高雄に暮らす96歳の男性が語る記憶にも触れる。この男性は子どもであった第二次世界大戦中、海軍の機体工場で働くために日本に連行された。彼は「博多夜船」を耳にすると、そのメロディを思い出して一緒に歌いだす。その瞬間、この曲は単なる歴史の遺物ではなく、身体に残存する記憶として立ち現れるのである。

二つの作品はともに、音がどのように複数の都市、世代、政治史に作用しているか、その形跡をたどる。機械の出す鳥の鳴き声と心に余韻を残す歌は、日常的な音を聞くという行為が、いかに規律や記憶の双方を保有しうるかを明らかにする。紙の花は港に、歌は身体に留まっている。

チェン・イエンチー [陳彥齊]

作家の言葉

こういう記録

今回、明治の開拓期に福岡からの人々が入植した札幌市福移地区の変遷と、福岡城の近現代の変遷、そして北海道との共通項でもある炭鉱についてリサーチを行った。福移の歴史と福岡城の歴史を同時並行で見えていくことで、幕末からの流れの中で北海道が日本の一部となっていた状況を、入植地と彼らの故郷の両方から見ていきたいと考えていた。また、北海道と福岡の炭鉱を比較することで、時代をもう少し先へと進めながら歴史の流れを見つめていこうとした。

一方で、途中オープンスタジオを行い、リサーチの中で集めた資料や写真も含めて、段ボールなどの工作材料とともに来場者が好きなように使えるようにスタジオを開放した。そうすることで、スタジオではリサーチ中の資料と工作素材、落書き、段ボールの家などが混在する状況が生まれた。はじめは、人々が私のスタジオにあるもので自由にさまざまなものを作ることで、本来の資料の内容やリサーチの目的、歴史の意味が失われたり、ずれたり、変化したりして、この試みは終わるのだろうと思っていた。

しかし、参加者の制作物や変化していくスタジオの状況を前にして、私自身もまた筆で形を描いたり、段ボールを切ったりと、手を動かして制作を行うことにした。これまであまり行ってこなかった「描く」「つくる」を、参加者に導かれて自分自身も行うことで、資料や記録、歴史とのこれまでとは異なる関わり方を模索することになった。

進藤冬華

作家の言葉

《はざまI》と《はざまII》

この作品は、川を渡り、都市の風景のなかに埋め込まれた図柄を観察し、日々まちを移動するなかで私が発見した、関連しあう様々な事柄を表現している。これらのモチーフは、過去の記憶を静かに物語る。織物は、二つの織り糸の合流地点となる。横糸は日頃の出会いをたどり、縦糸はまちを流れる水域を表現する。双方が交差することで、時間、記憶、空間が折り重なるところに紡がれた物語として、都市の姿があらわれる。

作品は、私が故郷から携えてきた記憶と、福岡や近郊の各地での出会いからもたらされた記憶との対話を映し出す。この作用を通じてふたつが共鳴しあい、さまざまな土地、文化、個人の歴史との関連が浮かびあがる。

作品は、博多織や久留米絣など伝統織物のリサーチをもとに、博多べいや畳、福岡でみた舞台や古地図などから着想を得て、紙織りの手法を用いている。層状に折り重なる様々な図像の断片がときに交差し、再び現れ、複数の語りを伴って姿を変容させる。福岡のまちと、私の身体が、記憶を収集するうつわとして次第にたちあがる。

ここでは、図柄やモチーフは装飾ではなく、歴史を記録し、歴史と出会うための時間の痕跡として存在する。

《時を包む》

パフォーマンス作品《時を包む》は、包むという行為を記憶と結びつけている。包むことは体験の断片を手を持ち、保護する行為になる。記憶がどのように伝えられ、保管され、時代をまたぎ継承されていくかを、織物を介してパフォーマティブに問い直す。

アルピタ・アカンダ